

「天足らしたり」が意味するもの

——万葉第一四七歌の解釈と鑑賞——

福 沢 武 一

天皇聖躬不豫之時、太后奉御歌一首
天原振放見者大王乃御寿長久天足有
天の原ふり放け見れば大君の御命は長く
天足らしたり（一四七歌）

長年敬愛してきた一歌である。おおらかな詠風に心をひかれる。とは言っても、理解のいきかぬものを残している。いま敢えて問題解決へ一歩を進めたい。

念のため作歌事情を一言する。——天智天皇が発病（不豫）されたのは、その十年九月のことだった。快癒を祈念して倭姫皇后（太后）が献歌された。それが主題歌であり、ご覧の通り不安を吹きとばす底の明るさだ。

最も古い訓と釈は次のようである。（括弧内が釈）

おほみいのちはながくてたれり 旧訓・拾穂抄
（天の長きを見て君の御命になぞらへて長く
て事足れりと也）

みいのちはながくあまたらしたり 京都大学本
朱・宣長玉の小琴

みいのちはながくあまたらしあり 和歌童蒙抄
おほみいのちはながくてたれり 代匠記精撰本
（空を望めば遙に遠く遙に長し。かくのごとく、御命も長く足り満ちてましまさむ……）

訓は京都大学本、釈は代匠記の線が通解になった。一つ気になる。御命が「足り満ちる」（天足らす）が実感になりかねる。新しいところで他の例文を引く。

一首の意は、天を遠くあふぎ見れば、悠久にしてきはまりなし。今、天皇の御寿もその天の如くに満ち足りておいでになる。聖寿無

窮である、といふのである。（斎藤茂吉氏秀歌）

ここでは「満ち足りる」が「無窮」に等しい。その等式がわからないことはない。が、実感を伴ってこない。

も一つ気になることがある。「長く」の影が薄いことだ。大切な一語だと思うのに。

この歌は「天の原ふりさけ見れば」といって直ぐ「大王の御寿は」と続けてある。これだけで見ると、吉凶を卜して吉の徴でも得たやうに取れるかも知れぬが、これはさういふことではあるまい。此処に常識的意味の上の省略と単純化とがあるので、此は古歌の特徴なのである。散文ならば、蒼天の無際無極なるが如く云々と補充の出来るところなのである。（同書）坪野氏秀歌、同解

吉凶を卜したのではない。省略・単純化でもない。天空を仰ぎ見、率然と「命長し」の感銘を受けたのだ。それを物語るものがある。「……見れば御寿は長く」と続く氣息だ。「御命は長くして」の意でなければならない。

なお、同書の評言の一節は次のようである。

天皇御不豫のことを知らなければ、ただの寿歌・祝歌のやうに受取れる御歌であるが、繰返し吟誦し奉れば、かく御願ひ、かく仰せられねばならぬ切な御心の、切実な悲しみが潜むと感ずるのである。特に、結句に「天足らしたり」と強く断定してゐるのは、却ってその詠嘆の究竟とも謂ふことが出来る。⁽¹⁾

この評言にも疑問をいだく。一歌から深刻な悲しみは汲みがたい。不豫とはいえ、快癒をひとえに信じ、いささかの疑いをもとどめない。

結果は裏目に出た。十二月に崩ぜられた。改めて一歌に哀れを催す。それはまた別な問題だと考える。

二

右に一例で通解を示した。なお一、二追記する。

……際涯のない天の如く、永遠無窮に満ち足りて居られます……。 (次田氏新版新講)

……天に象徴される天皇のみのちは限りなく、長久に満ち足らして居られる。(土屋氏私注)

このように理解されて来たのに対し、別解が与えられ、いまでは大方の支持をえている。ここでも若干で代表する。

御寿命は長久に天に充満してゐる。(武田氏新解・全注釈)

天皇の御寿命は悠久に大空一ぱいに満ち足りてあられます。(総釈土屋氏説)⁽²⁾

「天足らしたり」の「天」を、視覚される大空とした点、写実を好む現代人に迎えられた。

「天足らす」は「天を満ち足らはす」意。これと同語法のものに

天霧らし雪も降らぬか(一六四三)

といふのが見える。……従来「天」を「天の如くに」とか、単なる美称とか解してゐるのは、上欄の「天……」の語例に徴しても妥当ではない。(峯岸氏佳調)

上欄の語例というのは、

——天馳り(八九四)・天霧ふ(一〇五三)・天離る(三六〇八)・天伝ふ(一七五)。

実証の上に立った見解がにわかに支持をえ、新たな通説になったのは当然だ。しかし、疑問はさらに大きくならずにいない。

広々とした大空をはるばる眺めやれば、悠遠にして極りが無い。その大空一杯に、わが大君の御寿はとこしへに満ち溢れて極まりなくいらされます。(峯岸氏上掲書)

「長く」を「天足らしたり」へ修飾させざるをえなくなった。この説の通念だ。

長くは御寿命だから長くと用ゐたので、天足らすに対しては、適切に限定してゐない。

(武田氏新解) 佐伯氏監修三省堂古典学習シリーズ本、同説

「長く」は、形容詞より転成した副詞。(尾崎氏選釈)

限定(修飾)すべきでないのに、限定が適切でないと難じたり、「副詞」に仕立てては滑稽である。それよりなにより、「命長し」の「長し」——このかけがえのない一語を抹殺したのだ。改めて借問したい。そうまでして導入した「寿命が天に充満する」とは、一体どういうことだろう。仰ぎ見た眼にどのように認知されたというのか?

写実は望ましい。その結果、「天足らしたり」が実感として生動しなければ意味がない。

古勁簡素の調、加ふるに底には敬虔の念が張り切って居って、「御寿は長く天足らしたり」と断定的に抒べ去った所、非常の場合が自然に此の大興奮を起したものであらうが、作者太后の異常なる詩人であらせられた事も忘れてはならぬ。(総釈土屋氏評)

同感である。一歌に気迫がこもっているのだ。とくに「御寿は」以下が絶対の強さで響くのだ。もはや「天足らしたり」は単なる写実ではない。実感そのものだ。

三

実感のありかを求めて異説に聞こう。

天の遠く長きが如く、御寿命も長久であらうと寿いだ意に見るのであるが、……あまりに抽象的で概念的で、かかる特殊な場合の御歌としてはふさはしいとも思はれない。ここはどうしても景雲が長くたなびいたとか、彗星が光を垂れたとかいふ一種の景象を認めて、それに託して寿歌を上られたものでなくてはならぬやうに思ふ。(菊池氏精考)

瑞祥のごときものを想定するのは逸脱である。

事によると御病勢が募って御自ら心弱げなことを仰せられるので、仮りに設けてお慰め申したのであるかも知れぬ。(同書)

とんだ見当違いなところへいつている。

天を御室とします天つ御孫命におはせば、御命もとこしへに天足しなん。(考)⁽³⁾ 略解・古義・注疏・春陽堂万葉集講座(4) 対馬氏説、同解

天は天子様の御姿とも見られるものですから、あの様に天が広く極り無いのを見ると、今の陛下の御寿命が長く天のやうに満ち足り

で居ると思はれます。(鴻巣氏全釈)

このように天の思想を前提としていたとしたら、「天の原ふり放け見れば」は無用な措辞にすぎない。

天皇と天とを関連して考へる信仰はすでに一般的であったであらう……。(土屋氏私注)

天を信ずる人々にとっては、人命を支配するものは天であるとした。それで天を仰いで……。(全注釈)⁽⁴⁾

こうした着色された天ではなく、目に映された空がじかに、率然と、「命長し」の実感と確信を結果しなくて何の傑作だろうか。鴻巣氏は「傑作」の代りに次のように評しているのである。

実に雄大な心地よい作である。(全釈)

なお、橘守部の桧嬢手に始まる別解がある。岩波古典大系本も補注に採録している。それを要約する。

天にはも五百つ綱延ふ万代に国知らさむと五百つ綱はふ(四二七四)

……取り結へる縄葛は、この家のをさの御寿の堅めなり。(顯宗紀室寿御詞)

家を建てるのには、このように棟や梁を縄類で結び固めた。それは家主の長寿を念ずるしるしでもあった。

一首の意は、御舎の屋を振りあふぎ見れば、天皇の大御寿と百結び八十結びたれたる千尋の葛根は長く天たらしめてあり。いかで此葛根の如く、大御寿も長くあれかしとなり。
(桧嬢手)

美夫君志・山田氏講義・窪田氏評釈・折口氏恋の座・山本氏文芸読本と継承された。文末を次のように補正して。

さては此家長の御寿は 恙なしとほぎ申せる也。(美夫君志)

瑞祥を想定した精考に似ている。この方は長寿を祈念した人工物であるだけに丈低いものに終わってしまう。大空を仰ぎ、「率然と」感得する純粹さには遠く遠く及ばない。⁽⁵⁾

四

さきに「天……」の用例を列挙した。峯岸氏からの孫引きだった。それは「必要にして充分」ではない。次のものが欠けている。

わが背子は待てど来まらず 天の原ふり放

け見れば ぬばたまの夜もふけにけり 小夜ふけて嵐の吹けば 立ちどまり待つわが袖に 降る雪は凍り渡りぬ 今更に君来まさめや さなかづら後も逢はむと 慰むる心を持ちて ま袖もち床うち払ひ うつつには君には逢はず 夢にだに逢ふと見えこそ 天の足る夜を(三二八〇)

……さなかづら後も逢はむと 大舟の思ひたのめど うつつには君には逢はず 夢にだに逢ふと見えこそ 天の足る夜に(三二八一 或本の歌)

衣手に嵐の吹きて 寒き夜を君来まさずはひとりかも寝む(三二八二)

いまさらに恋ふとも 君に逢はめやもぬる夜を落ちず夢に見えこそ(三二八三)

ここに「天の足る夜」が繰り返されており、それは「よい夜」と通解されている。しかし、「この夜」は、嵐が吹きすさび、寒さたえがたいひどい夜だ。だてにも「よい夜」などとはいえない。

この一語によって夢中の悦楽に満足するといふ感じが歌はれた……。 (松岡氏論究)

嵐の吹いて雪の降る夜も「天の足る夜」と感ずるところに恋する人の心がある。(沢瀉氏注釈)

共寝しているとでもいえばともかく、いまはひとり寝ををかこつ寒夜だ。

天は、果てしもなく長いことのたとえ。「足り夜」は、足り具わった夜の意で、夜をほめていつた。(小学館本)

この語釈には諸説が一括されている。次のものまでも。

天の長き如く長き事の足りたる夜……。 (代匠記) 略解・折口氏口訳・次田氏新講・峯岸氏口訳、同解。

そればかりではない。小学館本の訳文の方は次のようになっている。

……幾夜も続けて

これまた先蹤がちゃんとある。

ひまなくしきりに夢にだに見えよとにや。
(代匠記)

足夜は、天足・国足・足日・足御代などの如く、満たりて闕くる事無をいふ。かくて反歌に「ぬる夜を落ちず」といふは夜毎の意也。

ここも今はただいめをたのむにて、夜な夜な
落ちず見ん事を足夜といふ也。天の云々とい
うふは古へ物を崇むる言……。 (考) 古義、
同解

これらの見解は顧みられなすぎた。これら古注
だけが正解していたのに。

要するに、主題歌の「天足らす」も「落ちず」
(欠かさず) そのものだ。

……滝の屋のあごねの原を 千歳に闕くるこ
となく 万代にあり通はむと……(三二三六)
……玉葛絶ゆることなく 万代にかくしもが
もと 天地の神をそ祈る かしこかれども
(九二〇 金村)

この「闕くることなく」「絶ゆることなく」も
同義語である。

……大君の任けのまぐまぐ この河の絶ゆる
ことなく この山のいやつぎつぎに かくし
こそ仕へまつらめ いや遠長に (四〇九八
家持)

……つがの木のいやつぎつぎに 松が枝の絶
ゆることなく 青丹よし奈良の京に 万代に
国知らさむと…… (四二六六 同)

「絶ゆることなく」の対語になっている「いや
つぎつぎに」も同義語乃至類義語である。そし
て、以上の例歌で気づかれたはずである、「落ち
ず」「闕くることなく」「絶ゆることなく」、さ
ては「いやつぎつぎに」と並んで、「万代に」「い
や遠長に」が配せられている。これまた類義語に
は相違ないけれど、単なる並列ではない。「万代
に」「いや遠長に」は総括であり、他はそこへ帰
一していく。

大君は千歳にまさむ白雲も 三船の山に絶ゆる
日あらめや (二四三 春日王)

これは「絶ゆることなく」「千歳にまさむ」の
語序と見るべきもので、前者が後者に総括されて
いく。主題歌も全く同様。「長く」は「天足らし
たり」に包括される。含みの豊かな点、音調のふ
くよかな点、「天足らしたり」は一歌の結びとし
て間然するところがない。

五

自分なりの見解に達し、改めて認識した。私解
の方向はとっくに与えられていたことを。

天足有は、天の長きが如く、つきなく満足

ひてあり……。 (古義)

御寿は、今は御不豫であらせられても、決
して欠くる様なことはなく、行末長くあらせ
給ふであらう……。 (作者別評釈「女流歌人」
川田順氏説)

右の「つきなく」「欠くる様なことはなく」が
「天足らす」の原義にふれている。

空が限りなく広がって居るやうに、あなた
の御寿命も、豊かに、長く、十分に御ありな
さるに違ひは御座いません。 (折口氏口訳)
「十分におありになる」、——これも「天足ら
す」の解明を方向づけている。それをいささか理
論づけたのが私解だった。

以上のようにして、「天足らしたり」の「天」
は空そのものではなかった。しかし、「天足らし
たり」は空疎な概念に終わらない。真実がこもっ
ている。確信に裏づけられている。それはなにに
由来するか？

今、大空を振り仰いで見ると、空は心地よ
く晴れて、いづこにも愁の影は見えない。天
皇の御寿命は、この天の如く際涯なくあらせ
られるよと、喜び給うた御歌である。 (鴻巣
氏全釈)

……大空をふり仰ぎ、はるかに見ると、水
色に澄んで一点の雲の影もなく、たしかに大
君のご寿命は長く、広大無辺の天にみちみち
ておわします。 (海野氏万葉の美しさ新しさ)

空の青にふれたのはこの二例だけである。「空
いっぱい寿命が充満している」という空より
も、澄みきった「天の原」をふり放ける方が具象
的だ。心情にかかわって来るのはこれなのだ。

一歌は秋空の紺碧を予想させる。天皇は九月
に、一書では八月に、発病された。一歌の所詠は
旧暦八、九月の交である。晩秋の透徹した碧空が
あったはずだ。それを主題歌に必要不可欠な条件
と考える。それが、理屈ではなしに、空そのもの
が、聖寿の安泰を示していた。ちょうど次の一歌
で夕焼け空がただちに月明そのもののあかしだっ
たように。

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜あ
きらけくこそ (一五 中大兄)⁽⁶⁾

澄みきった空気の中に夕映えを見たのであり、
それはただちに月明を直観させた。「今夜の月は

さやかなんだ」と、喜びあふれて断定した。

事情は主題歌も全く等しい。一歌の確信は天空の大いさだといおうか。大きくて深い。純無雑である。限りない明るさは、晴れ上がった秋空と作者の心の合唱だ。

補言したい。自然と作者が一つだったということ。理屈でないといったのはそれだ。澄みきった秋空と太后の心は一つに溶けあっている。一五歌にしてもそうだ。純一な心だ。これが万葉最高の歌境だといいたい。自然は人と共にあった。人は自然の懷にいだかれていた。

注

- (1) これと同等以上に哀切を極めるのは峯岸氏佳調の歌評である。
- (2) 学界は「天の如く」から「天に……」(写真)へと推移した。その逆コースをとったのが土屋氏である。昭和九年(名歌評釈・小径)・十年(総釈)に「天に……」の先鞭をつけ、戦後は次のように変質した。

アマは広大な意と共に神聖な意をもって居るの

であらう。接頭語としてさうした意味で用ゐられる。(私注)

- (3) 考の訓は次のようであった。

……みよはとこしくあまたらしぬる

- (4) 私注と同じ立場は川田氏女流歌人・斎藤劉氏名歌鑑賞・久松氏秀歌に、全注釈の線は三省堂古典学習シリーズ本にとられている。

また、次のような享受も「率然」性を失っている。

無窮の大空を仰いで、天皇の御寿命の長久を祝祷された御作である……。 (沢瀉氏注釈)

このように、祝いや祈りをこめるため大空を仰いだとする見解が諸家から出されている。そのように意図された空を私解はとらない。

- (5) 安藤野雁は御病氣回復を祈願する続命の修法を想定した。斎場に立てられた続命の旗を仰ぎ見、聖寿の長久を感取している。桧嬢手の流儀である。その著新考参照されたい。
- (6) 第一五歌の訓釈と鑑賞について詳述を必要とする。ここでは拙著万葉省察(一)に一切ゆだねることにした。